

II 分 析

1. 「A あなたの普段の生活について」と「B 勉強のことについて」の分析

(1) 相関係数の導出

まず、「A あなたの普段の生活について」と「B 勉強のことについて」の質問項目のうち、複数回答ではなく一つを選んで回答する質問項目について、相関係数を求めた。

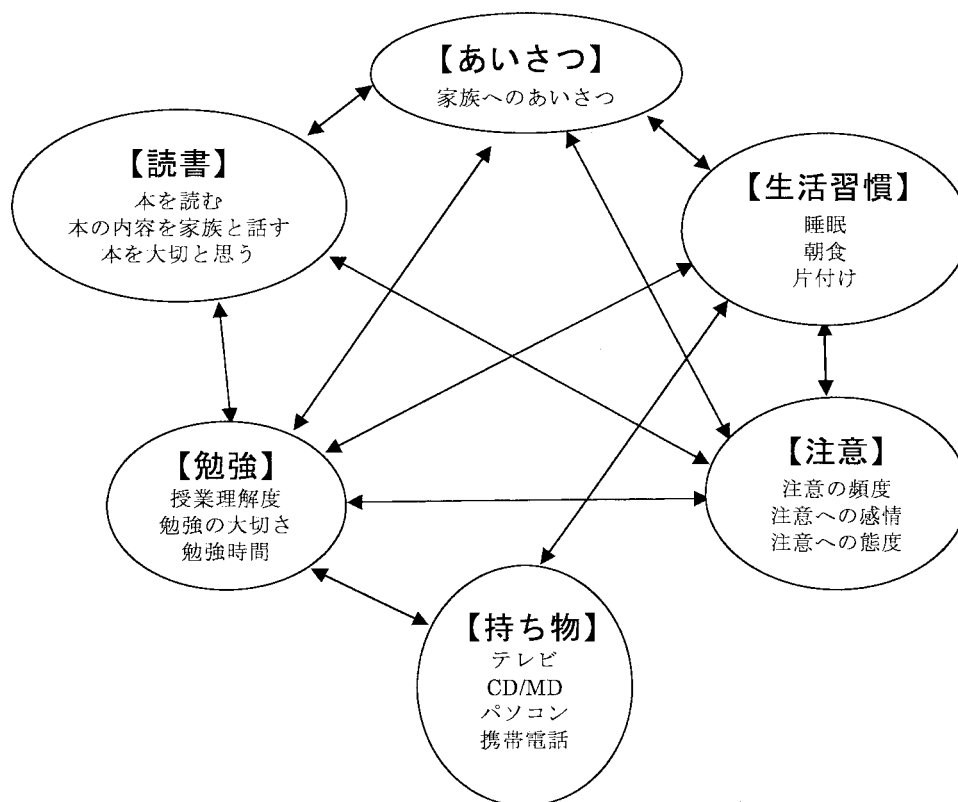
求められた相関係数の絶対値が 0.2 以上を目安に、下表のように整理した。なお、表中の回答の内容は、意味がわかりやすいような表現で示している。

質問番号	回答の内容	質問番号	回答の内容	相関係数		
				小5	中2	高2
1	家族にあいさつしない	2	就寝時刻が遅い	0.26		
		4	目覚めが悪い	0.23		
		6	自分で片付けをしない	0.25		
		8-2	家族からの注意に納得がいかない	0.21		
		8-3	家族からの注意に言い返す	0.20		0.21
		12	本を読まない			0.21
		13	読んだ本の内容について家族と話さない	0.22	0.29	0.22
		15	本を読むことは大切だと思わない	0.27	0.26	
		19	学校の授業がわからない	0.24		
		20	勉強することは大切だと思わない	0.33		
2	就寝時刻が遅い	3	朝、自分で起きない	0.23		0.21
		4	目覚めが悪い	0.36		0.25
		5	朝食を食べない	0.34		
		8-2	家族からの注意に納得がいかない	0.24		
		20	勉強することは大切だと思わない	0.21		
3	朝、自分で起きない	4	目覚めが悪い	0.45	0.29	0.34
		6	自分で片付けをしない	0.24		
4	目覚めが悪い	5	朝食を食べない			0.23
		6	自分で片付けをしない	0.24		
		8-1	家族からよく注意される	0.23	0.21	
		8-2	家族からの注意に納得がいかない	0.28		
		8-3	家族からの注意に言い返す	0.21		
		19	学校の授業がわからない	0.22		0.24
5	朝食を食べない	19	学校の授業がわからない		0.22	
		21	平日、勉強しない			0.22
		22	休日、勉強しない			0.23
6	自分で片付けをしない	8-3	家族からの注意に言い返す	0.21		
		13	読んだ本の内容について家族と話さない	0.25		
		15	本を読むことは大切だと思わない	0.21		
7-1	自分専用のテレビを持っていない	7-2	自分専用のビデオ・DVDプレーヤーを持っていない	0.21	0.51	0.56
		7-4	自分専用のゲーム機を持っていない		0.24	0.31
		21	平日、よく勉強する			0.27
		22	休日、よく勉強する			0.30
7-2	自分専用のビデオ・DVDプレーヤーを持っていない	7-4	自分専用のゲーム機を持っていない		0.21	0.32
		22	休日、よく勉強する			0.21
8-2	家族からの注意に納得がいかない	8-3	家族からの注意に言い返す	0.45	0.39	0.37
		15	本を読むことは大切だと思わない	0.27	0.28	
		19	学校の授業がわからない	0.20		
		20	勉強することは大切だと思わない	0.25	0.24	
8-3	家族からの注意に素直に返事をする	15	本を読むことは大切だと思ふ	0.23		
		20	勉強することは大切だと思ふ	0.22		

質問番号	回答の内容	質問番号	回答の内容	相関係数		
				小5	中2	高2
12	本をよく読む	13	読んだ本の内容について家族と話す	0.27		0.25
		15	本を読むことは大切だと思う	0.33	0.33	0.26
		19	学校の授業がよくわかる	0.21		0.23
		21	平日、よく勉強する			0.24
		22	休日、よく勉強する	0.23		0.22
13	読んだ本の内容について家族と話さない	15	本を読むことは大切だと思わない	0.35	0.33	0.30
		20	勉強することは大切だと思わない	0.25		
		21	平日、勉強しない			0.24
		22	休日、勉強しない	0.25		0.26
15	本を読むことは大切だと思わない	19	学校の授業がわからない	0.27	0.25	
		20	勉強することは大切だと思わない	0.50	0.30	0.29
		21	平日、勉強しない	0.24		0.26
		22	休日、勉強しない	0.25	0.24	0.26
19	学校の授業がわからない	20	勉強することは大切だと思わない	0.33	0.25	0.22
		21	平日、勉強しない	0.25	0.23	0.23
		22	休日、勉強しない	0.31	0.23	0.24
20	勉強することは大切だと思わない	21	平日、勉強しない	0.28	0.25	0.29
		22	休日、勉強しない	0.26	0.25	0.31

(2) 相関係数をもとにした項目間関連図の作成

次に、質問項目間の関連を把握しやすくするため、上記の相関係数をもとに、内容の似ている質問項目をまとめていくつかのグループに分け、項目間の関連図を作成した。
なお、下の図は中学校2年生の例である。



(3) クロス集計の設計

上記(1)(2)を踏まえ、下に示す単純集計結果から得られた学年間の違いを考慮しながら、クロス集計する質問項目を選定した。

なお、小学校2年生については、質問数が少なく内容が一部異なる質問があるなど構成が大きく異なるため、他学年の特徴を見てクロス集計を行うこととした。

単純集計結果から見た学年間の違い

- ・ 学年が上がるにつれて、就寝時刻が遅くなる傾向がある。
- ・ 学年が上がるにつれて、朝食をいつも食べる割合が低くなる傾向がある。
- ・ 学年が上がるにつれて、身の回りの片付けを自分でする傾向がある。
- ・ 学年が上がるにつれて、自分専用のもを持つようになる傾向がある。特に携帯電話については、小5が9%、中2が32%、高2が94%となっており、保有率の差が顕著である。
- ・ 学年が上がるにつれて、家族からの注意に対して言い返したり、無視して話を聞かなくなったりする傾向にある。
- ・ 学校が終わってからの過ごし方としては、小5が宿題や勉強をする、外出する、ゲームで遊ぶなどが多く、中2は圧倒的に部活動などをする割合が多くなる。高2はテレビやビデオを見る、ラジオや音楽を聞くなどが多くなる傾向がある。
- ・ 学年が上がるにつれて、読書量が少なくなる傾向がある。
- ・ 学年が上がるにつれて、悩みや心配事が全般的に増える傾向にある。(とくに勉強や進路、自分の顔やスタイル、性格、異性のことなど)
- ・ 学年が上がるにつれて、授業理解度が低くなる傾向がある。
- ・ 学年が上がるにつれて、勉強を大切だと思わなくなる傾向がある。
- ・ 学年が上がるにつれて、勉強をほとんどしない割合が高くなる傾向がある。
- ・ 学年が上がるにつれて、学習塾を含む習い事に通っていない割合が高くなる傾向がある。

(4) クロス集計の結果および考察

この調査の「A あなたの普段の生活について」と「B 勉強のことについて」の質問に関するクロス集計の結果および考察は、「C あなた自身のこと」の分析の結果をふまえて、浮かび上がってきた児童生徒の生活状況の特徴を〈調査から分かったこと〉として、また、学校や家庭に伝えたいことを《私たち大人ができること》として第三章に示した。

2. 「C あなた自身のことについて」の分析

(1) 因子分析について

「C あなた自身のことについて」に関する質問については、因子分析という手法を用いて分析した。

因子分析とは、回答パターンが類似しているいくつかの質問をまとめる統計的な手法であり、人々の意識や態度の背後にある要因を分析する際に利用される。

本調査の「C あなた自身のことについて」の場合、小学5年生は36の質問を8つの因子に、中学2年生は42の質問を10の因子に、高校2年生は42の質問を11の因子にまとめることができた。

なお、小学2年生については、質問が3つと少ないため分析対象から外した。

(2) 因子への名称付与

因子分析によりまとめられた質問の内容を見て、その因子の特徴を表す名称を付与する。これは、内容をイメージできる表現にすることで、分析を進める際にわかりやすく、およその傾向を把握するのに役立つためである。

下表に中学2年生の因子に付与した名称を示す。例えば、第1因子では、7つの質問がまとめられ、これらの内容から、「疎外感がある」という名称を付与した。

私はみんなと仲良くできない	第1因子 疎外感がある	私は怒りっぽい	第5因子 粗暴な態度をとる
みんな私をきらっていると思う		私はよく考えないで行動することがある	
私なんかいないほうがよいと思う		私は親の言うことをきかない	第6因子 努力は大切と思う
私はひとりぼっちでさびしい		私は友だちをぶったり乱暴する	
だれも私を大切にしてくれないと思う		「やればできる」と思う	
私は自分に価値がないか他人より劣っていると思う		今がんばれば将来はうまくいくと思う	第7因子 身体的症状を訴える
私は何をやってもうまくいかないと思う		もっと勉強すればもっといい成績がとれると思う	
友だちから誘われると断りたいのに断れない	第2因子 気弱である	よく吐き気がしたり気持ち悪くなる	第8因子 規範意識が低い
私は人目が気になって、すぐにはずかしくなる		よくおなかが痛くなる	
私はとても心配ばかりする		よく頭が痛くなる	
自分から意見を言うのは怖いと思う		私は授業や学校をさぼる	
ほしいものや、やりたいことがあってもいえない		うそをついたり、ひとをだますのはおもしろいと思う	第9因子 一人を好む
すぐに自分の方が悪いと思ってしまう	約束を守らなくてもよいと思う		
私には将来の夢がある	第3因子 将来に期待している	私はかっとなるとすぐに物をこわしてしまう	第10因子 自信がある
将来ついてみたい仕事がある		私は友だちをぶったり乱暴する	
将来やってみたいことがある	第4因子 感情的である	友だちというより一人の方が楽しいと思う	
私は怒りっぽい		学校は楽しいと思わない	
私はいらいらしている		心を打ち明けられる友だちがいない	
私はよく口げんかをする		自慢できることがある	
急に怒ったり、泣いたり、うれしくなったりする		今、興味を持って夢中になっていることがある	
私はかっとなるとすぐに物をこわしてしまう		私は目立つことが好きである	

この調査では、各学年の因子の名称を下表のように付与し、分析を進めた。

因子への名称付与

	小5	中2	高2
第1因子	疎外感がある	疎外感がある	疎外感がある
第2因子	感情的である	気弱である	感情的である
第3因子	気弱である	将来に期待している	将来に期待している
第4因子	将来に期待している	感情的である	気弱である
第5因子	身体的症状を訴える	粗暴な態度をとる	努力は大切と思う
第6因子	規範意識が低い	努力は大切と思う	身体的症状を訴える
第7因子	自信がある	身体的症状を訴える	一人を好む
第8因子	排便のリズムがくずれる	規範意識が低い	粗暴な態度をとる
第9因子	—	一人を好む	主体性がない
第10因子	—	自信がある	規範意識が低い
第11因子	—	—	排便のリズムがくずれる

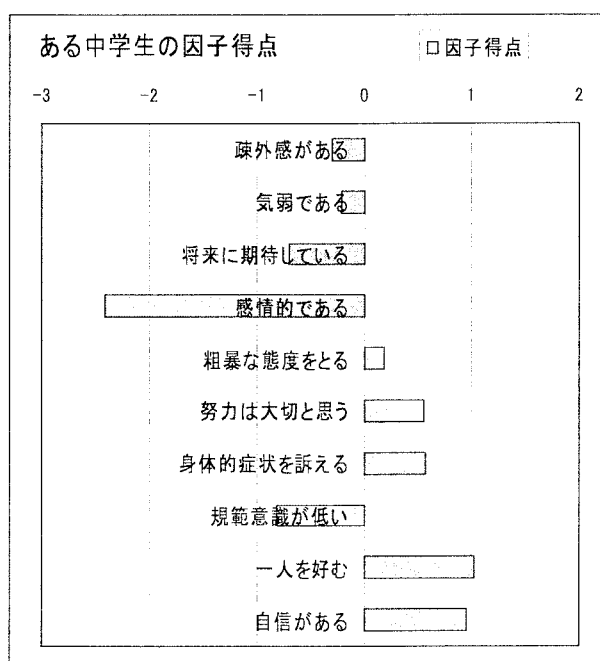
(3) 因子得点付与

一人一人の児童生徒にそれぞれの因子ごとに得点を付与する。因子得点の平均は0、標準偏差は1となるように計算され、正の値であればその傾向が強く、負の傾向であれば逆の傾向が強いことになる。

例えば、ある中学生の因子得点は下表のように導き出される。下の生徒の例であれば、「感情的ではなく規範意識は高い。また、自信があるという面を持ちながらも一人を好む傾向もある。」というようにおよその姿を想像できる。

ある中学生の因子得点

因子	因子得点
第1因子	-0.30072
第2因子	-0.22098
第3因子	-0.69499
第4因子	-2.41695
第5因子	0.18881
第6因子	0.55583
第7因子	0.57522
第8因子	-0.82054
第9因子	1.02624
第10因子	0.95995



3. 心と体の健康と生活習慣の関連について

(1) 因子得点群別にみた生活習慣とのクロス集計

生活習慣との関連を見るために、それぞれの因子ごとに各学年の児童生徒を因子得点の高い順に並べ、25パーセントごとに4つの群に分ける。例えば、「疎外感がある」という因子について、4つの群に分けることにより、相対的に「疎外感」を強く持っている群、やや強く持っている群、あまり持っていない群、ほとんど持っていない群に分類することができる。

次に、「A あなたの普段の生活について」及び「B 勉強のことについて」に関する質問から、以下の10項目を選定してクロス集計を行い、心と体の健康状態と生活習慣との関連を見た。

選定した生活習慣項目

1	あなたは、家族に「おはよう」「おはようございます」などのあいさつをしていますか。【あいさつをする】
2	あなたは、何時ごろ寝ることが多いですか。【就寝時刻が早い】
3	あなたは、朝、すっきり目が覚めますか。【すっきり目覚める】
4	あなたは、部屋の掃除や身の回りの片付けを自分でしますか。【自分で片付けをする】
5	あなたは、家族から注意されたり、意見されたりしたとき、どう感じる人が多いですか。【注意に納得する】
6	あなたは、家族から注意されたり、意見されたりしたとき、どのような態度をとることが多いですか。【注意に素直に応じる】
7	あなたは、本を読むことを大切だと思いますか。【読書は大切と思う】
8	あなたは、学校の授業がどのくらいわかりますか。【授業がわかる】
9	あなたは、勉強することは、将来の生活のために大切だと思いますか。【勉強は大切と思う】
10	あなたは、普段の日、学校が終わってからどのくらい勉強しますか。(学習塾での勉強も含む)【勉強時間が長い】

(2) 因子得点群別にみた生活習慣との関連

このようにして、4つの因子得点群と選定した生活習慣項目とのクロス集計を行った結果を、因子ごとに見やすいように並べ替えて次の表に示す。なお、因子分析の際、学年ごとに質問のまとまり方に多少の違いがあることや、別の因子でも同一あるいは似通った質問項目があることなどから、個別に論じることが難しい。そこで、因子の内容が似ているものを「自己効力感」「心配性」「反社会的」「孤独」「身体症状」の5つにまとめて考察することとした。

表中の「+」「-」などの記号については、例えば、「将来に期待している」と「あいさつをする」が「++」であれば「将来に期待している子はあいさつをする傾向が強い」ということを表している。つまり、表中の「+」は因子の表現に対する生活習慣項目の表現を肯定する傾向（以下、肯定的傾向）を表しており、「-」は因子の表現に対する生活習慣項目の表現を否定する傾向（以下、否定的傾向）を表している。

因子得点群別に見た生活習慣との関連

生活習慣項目 因子	小5											中2							高2							因子のまとめ								
	あいさつをする	就寝時刻が早い	すっきり目覚める	自分で片付けをする	注意に納得する	注意に素直に応じる	読書は大切と思う	授業がわかる	勉強は大切と思う	勉強時間が長い	あいさつをする	就寝時刻が早い	すっきり目覚める	自分で片付けをする	注意に納得する	注意に素直に応じる	読書は大切と思う	授業がわかる	勉強は大切と思う	勉強時間が長い	あいさつをする	就寝時刻が早い	すっきり目覚める	自分で片付けをする	注意に納得する		注意に素直に応じる	読書は大切と思う	授業がわかる	勉強は大切と思う	勉強時間が長い			
将来に期待している	++	+	++	++	++	+	++	++	++	++	+																							+
努力は大切と思う											+	下-	下-	下-	+	+	下-	+	+	+	+					下-		++	++	++	+			
自信がある	+			+							-			上-																				
気弱である																									+									
主体性がない																					下-													
感情的である	--	-	--	-	--	--	-	-	-			--	-	-	-	-	-	-	-	-	-	上-			-	--	-	-	-	-	-			
規範意識が低い	上-	上-	上-	-	--		-	上-	-	-	-		上-		上-	上-	-	-	-	-	-			-	-	-	-	上-						
粗暴な態度をとる											-	-	--	-	下+							上-					上-	上-	-	-				
疎外感がある					-		上-	-						上-																				
一人を好む										-	上-			上-							-													
身体的症状を訴える		-										上-																						
排便のリズムがくずれ								上-																		-								

※ 「++」は肯定的傾向が見られるもの、「++」は肯定的傾向がより強く見られるものを表している。反対に「-」は否定的傾向を表している。
 ※ 「上-」「下-」は、4分位したうちのそれぞれ最上位25%、最下位25%のみに否定的傾向が見られたものを示している。

ア 「自己効力感」について

小5では、「将来に期待している」という因子についてみると、全ての生活習慣項目について期待が高いグループは肯定的であると同時に期待が低いグループは否定的な傾向があり、互いに関連が深いことがわかる。中2では、「努力は大切と思う」という因子と生活習慣項目の関連が深いのが、努力は大切と思わないグループ（「努力を大切と思う」の最下位 25%群）に限っては、就寝時刻が遅い、授業はわからない、自分で片付けをしない、家族からの注意に納得しないなどの特徴がみられる。高2では、努力を大切に思うグループほど読書や勉強を大切に思い、授業もわかるという傾向が中2よりも強いことがわかる。

さらに、「自信がある」の因子も加え、「自己効力感」というまとめと生活習慣との関連を見ると、全体として肯定的な傾向があると見ることができる。

イ 「心配性」について

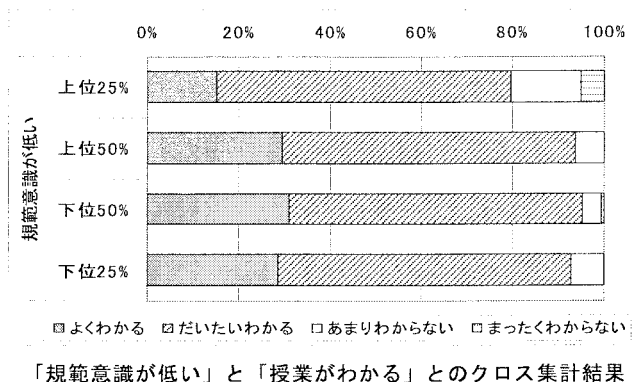
このまとめは、全体的に特徴が乏しかった。

ウ 「反社会的」について

このまとめは、全体的に各因子とも、多くの生活習慣項目に対して否定的な傾向であることがわかる。

「感情的である」の因子についてみると、各学年ともほとんどの生活習慣項目に対して否定的な傾向が見られた。「規範意識が低い」「粗暴な態度をとる」の因子でも、多く

の生活習慣項目に対し否定的な傾向が見られ、「上ー」と表示したものが多くことが特徴としてあげられる。右のグラフはその一例であるが、これらの因子はネガティブな内容であり、その最上位 25%群のみが他の群に比べて生活習慣が好ましくない傾向が強いことを示している。



エ 「孤独」について

このまとまりは、いくつかの生活習慣項目に対して否定的な傾向であることがわかる。

「疎外感がある」の因子では、小5、中2で「注意に納得する」に対して否定的な傾向であり、「一人を好む」の因子では、中2、高2で「あいさつをする」に対して否定的な傾向である。

オ 「身体的症状」について

このまとまりは、各学年に共通する傾向はなかったが、いくつかの項目で否定的な傾向が見られた。

以上のことから、この調査において、これまで教育現場で経験的に語られることが多かった児童生徒の心と体の健康と生活習慣についての関連が認められたといえる。

(3) 心と体の健康状態のバロメーターとしての「生活習慣」

私たちは、子どもの問題行動に接したときは、現象面に気を奪われ、行動を制限したり論じたりすることで解決してしまいがちである。また、普段から行動の前兆を察知する必要は感じていても、児童生徒の言動から推測するだけでは限界があり、行動に現われにくい心の状態をうかがうことは難しいと考えられている。

しかし、この調査から明らかになったとおり、心と体の健康と関連の深い「生活習慣」をみることで、ある程度その子の心と体の健康状態を間接的にチェックすることができると考えられる。

ただ、「生活習慣を整えれば心や体が健康になる」というような短絡的な結論ではない。おそらく両者は密接な関係にあり、心や体が健康な子は結果的に素直で落ち着いた生活を送ることができ、望ましい習慣を身に付けた結果として心や体が健康になるということも考えられる。

現在、児童生徒の心と体の健康が社会的な問題として指摘されている。これらの改善のために生活習慣をバロメーター（指標）として利用することで、その子の心や体の状態を知ることができる。このことにより、子どもへの接し方を見直したり、効果的なアドバイスをしたりすることができ、児童生徒の心と体の健全な成長に役立つことが期待される。